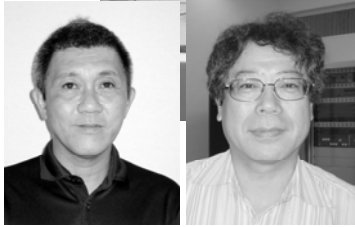


沖縄八重山文化研究会会報

第 226 号

発行 沖縄・八重山文化研究会
事務局 沖縄県立芸術大学付属
研究所 波照間永吉研究室
那覇市首里金城町三二六
TEL 〇九八・八八二・五〇四三



第二二六回沖縄・八重山文化研究会（会長三木健）は、二〇一一年十月十六日、県立芸大付属研究所内で開かれ、豊見山和行・板井英伸の両氏が「桃原用信氏製作の『八重山帆船』模型について―『和船』との関連から―」と題し、豊見山氏は近世史の観点から、板井氏は具体的な船の特徴や技術史的観点からそれぞれ発表。ここでは板井氏にその報告を簡単にまとめてもらった。

桃原用信氏製作の「八重山帆船」模型について―「和船」との関連から―

板井 英伸

はじめに

今回、発表者が取り上げる「八重山帆船」は、すでに実船が失われ、沖縄県立博物館と石垣市立八重山博物館に20分の1の、国立民族学博物館に10分の1の模型がそれぞれ収蔵されているほかは、戦後期のものをを中心に数葉の写真が残されているだけである。

今次発表では、それらの模型と写真から、その技術的特徴とその技術史の変遷について明らかにし、そのうえで、その背景についても考えてみたい。
なお、この模型は桃原用信氏によって製作され、一九七七年に県立博物館に寄贈されたものである。

I 「八重山帆船」とは（1）

桃原氏の解説から

沖縄県立博物館、国立民族学博物館所蔵の模型には、それぞれ作者の桃原用信氏自筆の解説板が添えられている。より詳しい国立民族学博物館の解説によれば、この船の船体は「50 吨級」で、実船の諸



沖縄県立博物館・美術館所蔵

元は長さ27メートル、深さ1・7メートル、巾5メートルだったという。そして同船は「宮古又は八重山の各離島即ち与那国、波照間、西表等」の水域で「材木、薪、石炭、又は人員」の輸送に用いられたが、「戦後急速に『エンヂン』が普及し船員が皆無と」なったことから「昭和26年に八重山から姿を消した」という。

しかし、発表者のこれまでの調査では、この船は主に石垣島と西表島の間広がる石西礁湖内を中心に活躍していたことがうかがえた。はたして昭和20年代当時、何隻の「八重山帆船」がどのように運用されていたものか、さらなる調査が必要である。

II 「八重山帆船」とは(2)

技術的特徴と技術史の変遷

沖縄県立博物館作成のキャプションは、この船を「和船構造」としていた。狭義の「和船」すなわち「弁才船」と同様、この船には「胴の間(船倉)」をふさぐ上甲板がなく、「水押(船首)」が上方に突出しているなど、確かに「和船」と類似する点が見出される。

しかし、この船のようにマストを三本備えた「弁才船」は聞いたことがないし、そのマストに装着されるセイル(帆)もいわゆる中国のジャンクや沖縄の馬艦船と共通する縦帆(片帆とも)であって、L/B比

(幅に対する長さの比)も「弁才船」よりはるかに大きく、さらにいえば喫水も浅く、「シア」と呼ばれる舷側の反りあがりもほとんどなく、「垣立」と呼ばれる舷側の装飾的な構造もない。すなわち、この船をして「和船」とは、とても言えないのである。

そして、諸資料から類似する船を探すと、「八重山蔵元絵師画稿」や一連の「那覇港図」など、近世末から近代初頭にかけての絵画資料には、これに似た船は描かれていない。また、「琉球王国評定所文書」など、に実態不明の船は登場するものの、それがこの船とどのような関係にあったかも、全くうかがい知ることができない。要するにこの船が近世にまでさかのぼって使われていたかは、はなはだ疑問なのである。

反面、戦前から戦後初期にかけての写真資料には、活躍するこの船の姿が映し出されている。のみならず、一部に「和船」の特徴を持ちながら「和船」とは言い切れない形態の船の姿は、八重山群島だけでなく沖縄島においても撮影されている。『沖縄県統計書』などを見ると、一九一〇年から15年にかけての沖縄県内では「日本形」と称する「和船」に類する船が爆発的に普及しているが、こうした「和船」風の船は近代以後の沖縄で全体的に普及したのではな

ただし、そうした沖縄島その他の同様の船と比較すると、この「八重山帆船」はもともとL/B比が大きく、船体が細長くなっている。こうした特徴は平水面に適応したものと言えようが、おそらく石西礁湖という比較的平穏な水域を中心に活躍したことから、水域の海況に合わせて変化し、完成したものと思われる。

おわりに — 今後の課題 —

戦中から戦後期にかけて、石垣島には数軒の九州出身者の材木店や造船所があったということ、しかもその多くは油津など「飢肥杉」の集散地出身の宮崎県民であったという。明治期後半以後の沖縄における建築材、造船材としての「飢肥杉」の流入についてはすでによく知られているが、彼らの移住が何らかの形で「八重山帆船」の登場に影響したものとも思われ、今後、そうした観点からの調査が必要と思われる。また、八重山群島・黒島の豊年祭の肥龍船(これもまたその技術史の変遷が不明)を、石垣島在の「桃原造船所」で建造したという話を聞いたことがある。「八重山帆船」のみならず、石垣島での調査からは、こうした実態不明の他の船についても、何かしらがかりが得られそうに思われる。これについてもさらなる調査が必要である。

文化短信

『竹富方言辞典』に菊池寛賞

第59回菊池寛賞（日本文学振興会主催）に竹富島の言葉約一万七千語を収録した南山舎の『竹富方言辞典』が選ばれた。授賞式は一月上旬に東京都内で開かれる。

菊池寛賞は文学、映画・演劇、新聞、放送、出版、その他の文化活動一般で業績のあつた個人や団体に贈られる。県内では、一九七二年に「沖縄タイムス」の創刊にかかわつた豊平良顕、九二年にひめゆり平和祈念資料館がそれぞれ受賞している。

前新氏は、教職を退いたあと一九八五年から竹富島の言葉を集め始めた。島で一五三回もの「方言聞き取り学習会」を開くなどし、書きためた記録はノート四〇冊にものぼつた。七年前から辞典作りに向けて作業を開始。編集は県立芸術大学の波照間永吉教授と元教員の高嶺方祐さん、入里照男さんが担当。B五判、約一五〇〇ページに及ぶ大著となった（本会会報二二二二号で新刊紹介）。なお、前新氏は第27回八重山毎日文化賞（八重山毎日新聞社主催）の正賞も受賞している。

県指定文化財 八重山から4点

県教育委員会はこのほど、県指定有形文化財に、竹富町波照間の「下田原貝塚出土品（考古資料）」と「古我地原貝塚出土品（考古資料）」（うるま市石川）、「紙本着色東任鐸（知念里之子親雲上政行）（絵画）」、「紙本着色宮平長延画像（絵画）」、「蔵元絵師の画稿（歴史資料）」を新たに指定した。考古資料の県指定は初めて。

下田原貝塚出土品は土器一点、石器四五点、骨製品二六点、貝製品一三七点など。戦後の沖縄考古学の本格的な出発地となつた遺跡であり、先島先史時代編年の標識遺跡として位置づけられる重要な遺跡。

知念里之子親雲上政行の絵画は八重山島在番として赴任した首里士族の東任鐸の肖像画、宮平長延は大浜間切の頭職を勤めた人物。両絵画とも首里、八重山士族を描いた現存する数少ない肖像画で、琉球絵画史上、極めて貴重な作品とされた。

八重山博物館所有の蔵元絵師の画稿は、彩色画稿六点を含む一四点。近世琉球時代の末期から明治初期にかけての八重山の社会や日常生活など、蔵元絵師として活躍した喜友名安信や宮良安宣が描いている。近世八重山の社会や民俗を示す資料として極めて貴重な作品として指定された。

崎山直先生のご冥福を祈つて

崎山直さんは、本会発足当時から、遠く八重山の地にあつて本会の活動を応援してくださつた方である。その崎山さんが一月二九日に亡くなられた。周知のように崎山さんは石垣市史編集を軌道にのせた方であり、八重山における歴史・文化的な活動の中心を担つてこられた方である。ここに改めて崎山さんのご冥福を祈るとともに、本会会長の三木健の追悼文を掲載したい。

崎山直さんを悼む

三木 健

前石垣市史編集委員長で、石垣市文化協会会長などをされた崎山直さんが一〇月二九日夜、逝去された。享年八三歳であつた。崎山さんとは一九七三年に「東京・八重山文化研究会」を共に創立した時以来の八重山研究の同志である。当時、崎山さんが会長をされ、私が事務局長でスタートして以来のことである。崎山さんはその名の通りの実直なお方で、人一倍郷土を愛し、郷土の歴史研究に情熱を燃やし続けた方である。私の尊敬する先輩であり、肝胆相照らす同志でもあつた。

<p>数年ほど前から体調を崩し、リハビリに専念しておられた。私は石垣に出かけるたびに大川のご自宅を見舞っていた。お話しはいつものようになさっていたので、こんなに早くお別れしようとは思ってもよらなかった。綾子夫人の話によれば、亡くなるその日も、いつものように話をされていたという。命のはかなさを感じる。</p>	<p>一九二八（昭和三）年に石垣島で生まれた崎山さんは、戦時中は鉄血勤皇隊として、パンナ岳やおもと山などで通信班の体験を持つ。敗戦直後、農林高校の教師をしていたが、思うところあって上京し、立正大学大学院で歴史を学び、卒業して東京都内の高校で教師をする。</p>	<p>「東京・八重山文化研究会」を立ち上げたのは、その頃である。東京でふるさとを思う同志が集まり、月一回の例会を開催し、毎回、手書きの『東京・八重山文化研究会ニュース』を出した。タブロイド版の裏表二ページに例会での研究報告や、郷土の文化ニュース、刊行物などを紹介した。私も記事を書いて送ったが、手書きの作業はすべて崎山さん。情熱がなければ出来ることではない。今でもこの『研究会ニュース』を見る度に、当時の苦勞を思い出す。同研究会は今も後輩たちにより継続され、例会も四百回を超え、新城敏男や得能寿美といった優れた研究者を輩出している。</p>
<p>東京での崎山さんとのコンビは四年ほど続き、私は一九七五年に、崎山さんは一年後の七六年に沖縄に引き揚げられた。ちょうどその頃、たまたま石垣に行く飛行機の中で、当時の内原英郎市長と乗り合わせたことがある。私はその席で石垣市がいまだ市史編纂事業をしていない遅れを指摘し「これでは最南端の文化都市とは言えない」と、少し挑発的に市史編纂事業を提言した。すると内原市長は「よし、わかった。しかし、これをいつたい誰ができるのかね」という。私はすかさず「最適任者がいます」と、崎山さんを推薦し上げた。内原市長は「そうか、彼なら農高の頃からよく知っている」ということであった。</p>	<p>翌年、崎山さんは市役所入りし、やがて市史編集室長となり、市史編纂業務を発足させた。『市民の戦時・戦後体験記』（全四冊）などを皮切りに、次々といろんな成果を出した。室長時代に市史編集のルールを敷き、軌道に乗せた功績は大きい。一九八九年に定年で退職された後も、市史編集委員会、文化財保護審議会、石垣市文化協会、八重山歴史研究会の各委員長や会長を務められ、石垣市の文化発展に貢献されたのは周知のとおりである。</p>	<p>その間、請われるままに各機関や団体などで郷土史に関する講演をされたが、これらの原稿を取り纏めて二〇〇〇年に『八重</p>
<p>山の歴史と文化』という一書を刊行した。崎山さんの郷土史に対する見方は、単に事実を知ればよいということではなく、「郷土史の枠を超えて、普遍的存在たる人間に即して、科学的に整理し、考え直してみる」（「八重山の歴史を考える」という作業を通し、歴史をより身近なものにしていくところにある。その姿勢には、いつも学ぶところが多かった。「世（ゆー）の思想」なども残している。</p>	<p>崎山さんとは「いつか二人で八重山の新しい歴史を書こう」と話していた。崎山さんが前近代を、私が近代を担当する構想であった。これは果たせずに終わった。しかし、一九九二年刊の拙著『八重山近代史の諸相』は、崎山さんの前書とは装丁がよく似ている。両書とも蔵元絵師の風俗画を表紙に、崎山さんご自身が装丁し刊行したものである。</p>	<p>その理由について崎山さんは、手紙に「かねて願っていた共著（近代編・前近代編）の変形もしくは姉妹編でもお考えいただければ幸いです」と書いていた。そこまでご配慮下さった崎山さんに感謝するとともに、もっともつと一緒に仕事が出来た、ご冥福をお祈りするばかりである。</p>